ともだちのときちゃん

「ともだちのときちゃん」を読んで

2年　Y・Fくん

ときちゃんの気もちを知りたくて、ときちゃんみたいにアリを見てみた。ぼくの見たアリたちは、みんなバラバラにすきなところをいったりきたり。でも、そのとなりで、ダンゴ虫たちがみんなでそろってうごいていたよ。こそこそとお話ししながら、同じ方こうへすすんで行ったんだ。

さつきちゃんが知っていることをどんどん言ってしまうことや、じぶんとはちょっとちがうときちゃんをおいてきぼりにしたり、知らんぷりする気もち。ぼくは、少しわかるような気がする。

ときちゃんとさつきちゃんは、ぜんぜんちがう人。考えること思うこと、かんじることだってちがう。ちがうところばかり見つけて〝ちがうちがう〟と言っても、だれもたのしくなくてうれしくないと思う。ちがうところがあっても、どうしてそう思うのかな？と少しでも考えてあげられると、ちがうからイヤだとか、キライだなとか思わないでいられるんじゃないのかな。

ちがうものをもっているから、いろいろなことをはっ見することができると思う。でもそれは、何もしなかったら見つけられないから、さつきちゃんがときちゃんのことばで気がついていけたように、少しずつ気がついて、あいてのことを思ってあげて、見つけていけたらいいな。

気もちや考えがぜんぶ同じになることはむずかしいことだけど、同じものを見ていいなと思えたり、同じものをたべておいしいなと思えたら、とてもうれしいと思う。さつきちゃんがときちゃんとともだちでよかったなと思ったような、同じものを同じところから見たりかんじたりすることができるともだちに、ぼくもいつかあえるといいな。いつかかならずあえますように。